

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年9月6日現在

機関番号：82708

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2018

課題番号：16K16670

研究課題名(和文)日系アメリカ人の朝鮮戦争従軍と社会参入：ジェンダーとエスニシティの視点から

研究課題名(英文) Military Service and Social Participation of Japanese-American Korean War Soldiers: From Gender and Ethnic Perspectives

研究代表者

臺丸谷 美幸 (Daimaruya, Miyuki)

国立研究開発法人水産研究・教育機構・水産大学校・講師

研究者番号：40755394

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,700,000円

研究成果の概要(和文)：アメリカ合衆国市民として朝鮮戦争へ従軍した日系アメリカ人二世に焦点をあて、従軍が彼らの社会生活へもたらした影響をジェンダーとエスニシティの視点から解明した。カリフォルニア州出身者を対象とし、日系新聞の分析、退役軍人へのインタビュー調査、朝鮮戦争記念碑建設などにみる従軍経験の再記憶化の考察を行った。日系二世たちにとって従軍経験は退役後の社会参入を促し、進学や就職へ直結する生活基盤を築く契機となったが、この背景には1950年代の冷戦対立と国内の人種政策が密接に絡んでおり、これは合衆国における移民の排除と包摂を巡るポリティクスとして捉えることが可能であることを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、次の2点である。第一に冷戦初期の合衆国国内における人種、エスニシティおよびジェンダー政策を基に、当時のエスニック・マイノリティの従軍状況がいかに変化したかについて1950年代における朝鮮戦争期の二世兵士の考察を通して提示することができた。第二に第二次世界大戦期に日系人強制立ち退き・収容を経験した西海岸の日系人たちは、大戦後、いかにして社会参入を果たしたのかの過程を、朝鮮戦争期の従軍者に焦点を当て示すことができた。1950年代の日系二世における従軍問題という、大戦後の日系人研究の新たな課題を提示した。

研究成果の概要(英文)：This paper discussed Nisei Japanese-Americans who served in the Korean War from gender and ethnic perspectives. It revealed changes in Nisei's social status before and after their military service. I researched Californian cases through Japanese-American ethnic newspapers, interviews with veterans, and analysis of the construction processes for war memorials in both the United States and Korea. The paper showed that the military experiences of Nisei facilitated their social integration and provided them opportunities to build their fundamental lives in the 1950s, such as accessing higher education or getting a decent job. The background of the drastic changes in Nisei's social states interacted with the Cold War racial policy. The paper suggested that Nisei Korean War soldiers could be classified as a case of racial integration during the early Cold War era, in contrast with other ethnic groups who were excluded in the same racial rhetoric.

研究分野：ジェンダー研究、アメリカ史、アメリカ研究

キーワード：ジェンダー エスニシティ 日系アメリカ人 二世兵士 朝鮮戦争 再定住 日系人強制立ち退き・収容問題

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) 朝鮮戦争(1950-1953年)はアメリカ合衆国(合衆国)では「忘れられた戦争」と呼ばれ、総力戦であった第二次世界大戦や「負けた戦争」であるベトナム戦争と比べると、人々の関心を集めない戦争といわれてきた。朝鮮戦争へ参戦した日系アメリカ人二世(日系二世)の存在は、今日の日系アメリカ人コミュニティにおいてもほとんど知られていない。さらに1940年から1950年代の日系人に関する研究は、約12万人の西海岸の日系人が太平洋戦争期に甚大な被害を受けた強制立ち退き、収容政策に関わる問題を中心に展開してきた。日系二世の従軍についても、第二次世界大戦期に合衆国陸軍で結成され、人種隔離部隊であった第442戦闘連隊や第100大隊に関するものが大半で、442連隊が1946年に解隊した後の日系二世の従軍を扱ったものは少ない。先行研究としてエドウィン・ナカソネ(Edwin Nakasone)の*The Nisei Soldier: Historical essays on world war II and the Korean War*(1999)、柳田由紀子の『二世兵士激闘の記録 日系アメリカ人の第二次大戦』(2010)が挙げられるが、主眼はあくまでも第二次世界大戦期にあり、朝鮮戦争は二世部隊が大戦後に経験した戦闘として、後付け的に扱われているに過ぎない。
- (2) 一方で朝鮮戦争は、米軍再編の重要な転換点として位置付けられる。1948年6月にハリー・S・トルーマン(Harry S. Truman)大統領は、大統領行政命令第9981号(the Executive Order 9981)へ署名し、軍隊内部における「すべての人の従軍時に平等な扱いと機会均等」を保証した。さらに同年には「女性の従軍に関する統合法」(the Women's Armed Services Integration Act of 1948)も連邦議会を通過しており、これらがアフリカ系アメリカ人兵士だけでなくアジア系アメリカ人である日系二世の待遇にも影響を与えた。さらに言えば、日系二世たちには男性、女性を問わず、偶発的にはあるが、アフリカ系アメリカ人よりも人種統合政策が有利に働いた。かつての「敵性外国人」であった日系人が兵士となり確固たる愛国心を示すことは、当時の合衆国政府にとって好都合であったからだ。二世兵士の存在は、合衆国が冷戦下、反共政策を打ち出しながらも、人種平等でリベラルな国家を実現していることを示し、喧伝することができた。朝鮮戦争期の従軍者の大半は二世男性であり、約5000~6000人が従軍したと推定されている。うち2000~3000人は朝鮮半島へ派兵された。また、わずかではあるが、二世女性も志願している。陸軍だけでなく、海軍、空軍、海兵隊へ志願が認められ入隊していくのも朝鮮戦争期からであった。
- (3) 本研究では、冷戦初期の合衆国において、1948年を起点とする米軍再編の重要性に鑑み、朝鮮戦争期の日系二世による従軍経験について、ジェンダーとエスニシティの視点から考察するという着想に至った。

2. 研究の目的

- (1) 本研究の目的は、朝鮮戦争へ従軍した日系二世について、従軍は従軍者の社会生活にいかなる影響をもたらしたのかをジェンダーとエスニシティの視点から解明することにある。
- (2) 具体的には次の4点について解明を目指した。朝鮮戦争当時の1950年代から現在に至る朝鮮戦争期の二世兵士に対する社会的評価、従軍者の生活環境と社会的立場の変化、ジェンダーの差異がもたらした従軍経験や従軍後の経験の違いとその実態、従軍者自身の朝鮮戦争に対する戦争認識と個人的な従軍経験の再記憶化について。

3. 研究の方法

- (1) 対象設定: 調査地はカリフォルニア州と設定した。1940-50年代当時よりハワイ準州(当時)を除き、合衆国において当時より最大の日系人人口を抱えていたためである。調査対象者は朝鮮戦争へ従軍した日系二世とした。なお、インタビュー対象となった日系二世の朝鮮戦争退役軍人は1920年後半から30年代生まれの比較的若い世代にあたるため、朝鮮戦争が初戦である。
- (2) 1950年代における朝鮮戦争期の二世兵士像の分析: Japanese American Citizens League(JACL:日系アメリカ人市民協会)が刊行する新聞型機関紙『パシフィック・シティズン』の記事を基に、当時の朝鮮戦争従軍者に対するコミュニティ内の評価を調べた。計画当初は、同時代に合衆国で製作された映画や小説を中心に社会全体における朝鮮戦争期の二世兵士像を検討するつもりだったが、より現実的な当時の兵士に対する評価を探るため、先の機関紙や『羅府新報』などエスニック新聞の記事の言説・表象分析を中心に行った。
- (3) 日系二世の朝鮮戦争退役軍人を対象としたインタビュー調査の実施: カリフォルニア州にて朝鮮戦争期の日系人の従軍経験者へインタビュー調査を実施し、彼ら/彼女らの従軍前後における生活状況の変化について検討した。インタビューに加え、日系二世の退役軍人たちが執筆した自伝やロサンゼルスを中心に活動しているJapanese American Korean War Veteran(JAKWV:日系人朝鮮戦争退役軍人会)が刊行したインタビュー集やニューズレターなどを分析した。
- (4) Japanese American National War Memorial Court(日系人全米戦争記念碑庭)など二世の朝鮮戦争退役軍人によって建設された戦争記念碑や今日の退役軍人会の顕彰活動を通して、個人の戦争経験の再記憶化の過程について分析した。

4. 研究成果

- (1) 1950年代当時における朝鮮戦争期の二世兵士像の解明：1950年代当時、朝鮮戦争期の二世兵士がいかに理想的な二世男性像としてメディアに登場したのかを、朝鮮戦争期では唯一の議会名誉勲章授与者である、ヒロシ・ハーシー・ミヤムラ軍曹に注目し、ミヤムラの叙勲を巡る『パシフィック・シティズン』の言説・表象分析を行った。ミヤムラは当時の合衆国政府が望む最も理想的なエスニック・マイノリティ兵士としての条件を兼ね備えた人物であった。戦後の日系人の社会参入を促進したい JACL の日系二世のオピニオンリーダー達からも賞賛された。結果、ミヤムラは二世男性の誠実さや忠誠心を代表する存在となった。ミヤムラの事例は、1950年代の日系二世における合衆国の主流社会への包摂過程を示すと同時に、彼ら二世兵士の市民権とは自身の命を担保としてようやく社会的承認を受けられたのであり、市民権の軍事化に他ならなかったと結論付けた。
- (2) 日系二世の退役軍人へのインタビュー調査の実施と成果：2016年8月（3週間）、2017年8月（3週間）、2019年3月（2週間）と3度渡米し、ロサンゼルスとその近郊、サンフランシスコ、サクラメント、サンノゼ等でインタビュー調査を実施した。日系二世の退役軍人パレードが行われた「二世ウィーク」（2016年8月と2017年8月）においては、終日調査対象者に同行し、参与観察を行った。調査対象者の参戦動機について、第二次世界大戦期の二世兵士の言説にみられるような合衆国への忠誠心や愛国心よりも、当時の彼らの生活により根差した経済的、社会的理由を挙げる傾向が見られた。帰還後の軍人恩給、特に高等教育へのアクセスや大学卒業後の安定した職の獲得などである。従軍の背景には先の大戦下の日系人強制収容立ち退き・収容が色濃く影を落としている。加えて強制収容で耕地や財産を失った一世に代わって、二世たちが一家の稼ぎ手として、社会的自立が求められた時期でもあった。加えて1950年代当時における二世男性と徴兵問題についても指摘できる。朝鮮戦争が開戦した時点で合衆国では事実上の徴兵制度が敷かれており、18歳以上の合衆国市民である男性には21カ月の徴兵義務が課されていた。これは当時、徴兵対象年齢であった二世男性も同様であった。
- (3) 記念碑建設と顕彰活動にみる二世兵士の戦争認識：ロサンゼルスの日系人街リトル・トーキョーに所在する日米文化センター（Japanese American Cultural Community Center: JACCC）の敷地内には日系人全米戦争記念碑庭と名付けられた戦争記念碑の一群が存在する。米西戦争からイラク戦争に至るまで「日系人」の戦死者のみを追悼の対象とする記念碑群である。1990年代から2000年代にかけて記念碑庭の建設を推し進めたのは、地元の日系人朝鮮戦争退役軍人会（JAKWV）であった。一連の記念碑建設と顕彰活動は、個人的な従軍経験を「日系二世」によるエスニック集団の経験であったとして意味付けし、再記憶化しようとする試みと解釈できる。だがその反面、これは従軍者それぞれの多様な戦争経験を画一化する懸念もある。
- (4) まとめ：本研究は朝鮮戦争期の二世兵士の考察を通して、1950年代におけるエスニック・マイノリティに対する軍隊における人種政策および待遇の変化と影響を考察してきた。西海岸出身の日系人にとって1950年代前半とは、第二次世界大戦下の日系人強制立ち退き・収容の時代が終了した直後にあたる。日系人が収容所を出所し、生活を再建し社会に参入していく過渡期、すなわち「再定住期」である。本研究は、再定住期における日系二世の従軍経験という、新たな日系二世の1950年代の課題を提示、議論した。

日系二世たちにとって朝鮮戦争への従軍経験は結果的に社会参入を促し、高等教育へのアクセスや就職に直結した。しかし、これは当時、冷戦初期の東西冷戦対立が激化し、合衆国内では公民権運動が興隆し、さらに大戦後の新たな人種間の緊張関係が生まれた背景があってこそ、成立していたことに留意すべきである。つまり日系二世の朝鮮戦争従軍経験は、合衆国における移民の排除と包摂を巡るポリティクスの中で理解することができるのである。

最後に、本研究におけるジェンダー視点の重要性をあらためて確認しておきたい。特定のエスニック集団において、いつ、どのような人々に対していかなるジェンダー役割を社会的に付与されたのかということは、そのコミュニティを考察するにあたり重要な視点である。例えば（1）ミヤムラのメディア言説・表象では、ミヤムラへの功績への評価は、戦後の日系人男性における男性性の回復問題と結びついている。また数こそ少ないが、二世女性の朝鮮戦争従軍者への調査も継続している。二世女性の1950年代の社会進出と朝鮮戦争期の従軍については今後の課題としたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1件)

臺丸谷美幸、ハーシー・ヒロシ・ミヤムラはなぜ議会名誉勲章授与者となったのか 1950

年代の朝鮮戦争期日系人兵士像の考察（研究ノート） 査読無（依頼原稿のため） アジア系アメリカ人研究学会誌 AALA Journal、第 24 号、2019、51-55

〔学会発表〕(計 11 件)

Miyuki Daimaruya, Unknown Heroes: Military Service of Japanese American Nisei during the Korean War and Their Citizenship, Understanding Diverse and Inclusive Communities, Conference 2018, Queens College Mellon Faculty Diversity Project, Queens College-CUNY, (2018.11.13)

臺丸谷美幸、日系アメリカ人兵士の東アジア経験 - 朝鮮戦争期を中心として、第 55 回韓国日本文化学会国際学術大会、(2018.9.8)

臺丸谷美幸、日系アメリカ人朝鮮戦争退役軍人の記念碑顕彰活動と市民権問題、北九州アメリカ史研究会、(2018.7.21)

臺丸谷美幸、日系アメリカ人二世の朝鮮戦争への従軍経験と市民権 ジェンダーとエスニシティの視点から、日本アメリカ学会第 52 回年次大会、分科会（アメリカ女性史・ジェンダー）(2018.6.3)

臺丸谷美幸、日系二世の朝鮮戦争を巡る記憶の形成：日系人全米戦争記念碑庭建設運動を中心として、日本西洋史学会第 68 回年次大会、広島大学、(2018.5.20)

臺丸谷美幸、日系アメリカ人の朝鮮戦争への従軍と大戦後の社会参入：エスニシティとジェンダーの視点から、2017 年度関西・中国四国・九州 3 支部合同研究会、日本比較文化学会、西南女学院大学、(2018.2.3)

臺丸谷美幸、慰安婦少女像建設運動を巡るローカルコミュニティの反応：アジア系アメリカ人を中心に、IGS セミナー・IGS 関連研究会「冷戦とジェンダー」研究会 第 2 回研究会「『慰安婦』問題を巡るグローバル・ジャスティス」、お茶の水女子大学ジェンダー研究所、(2017.1.30)

Miyuki Daimaruya, Rethinking of Japanese American Resettlement and Military Service in 1950s: The Citizenship of a Californian Nisei Soldier in the Korean War in From Internment, to Korea, to Solitude: Memoir of Robert M. Wada, Asia-Pacific Studies Seminar at Osaka University, (2016.9.23)

Miyuki Daimaruya, How Did 1950s Hollywood Films Represent Japanese American Soldiers on the Korean Battlefield?, American Studies Seminar at Osaka University, Osaka University, (2016.11.22)

臺丸谷美幸、日系アメリカ人女性による朝鮮戦争従軍経験と社会参入：ジェンダーとエスニシティの視点から、ジェンダー史学会第 13 回年次大会、武蔵大学、(2016.12.18)

臺丸谷美幸、調査報告：日系アメリカ人朝鮮戦争従軍兵士によるトランスナショナルな記憶の構築、IGS セミナー・IGS 関連研究会「冷戦とジェンダー」研究会 第 1 回研究会ノックオフシンポジウム、お茶の水女子大学ジェンダー研究所（IGS）(2016.10.24)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。